

埋伏歯に対する矯正歯科のアプローチ



九州歯科大学歯学部 顎口腔機能矯正学分野
教授 川元 龍夫

略 歴

学歴

1982年（昭和57年）山口県立山口高等学校理数科卒業
1988年（昭和63年）東京医科歯科大学歯学部卒業
1992年（平成4年）東京医科歯科大学大学院歯学研究科修了 博士（歯学）

職歴

1992年（平成4年）東京医科歯科大学歯学部附属病院 医員
2000年（平成12年）東京医科歯科大学大学院 顎顔面矯正学分野 助手
2007年（平成19年）東京医科歯科大学大学院 顎顔面矯正学分野 助教
2010年（平成22年）東京医科歯科大学大学院 顎顔面矯正学分野 講師
2012年（平成24年）
~2013年（平成25年）Visiting Research Fellow
Department of Orthodontics and Craniofacial Biology, Radboud University,
Nijmegen Medical Centre, Nijmegen, the Netherlands.
2015年（平成27年）九州歯科大学 顎口腔機能矯正学分野 教授

日本矯正歯科学会；認定医、指導医、管理指導医、代議員、学術委員会委員、
九州矯正歯科学会；理事（編集担当）、口腔病学会；評議員、九州歯科学会；評議員、
日本顎変形症学会；評議員、編集査読・用語検討委員、認定医制度委員、
福岡県社会福祉審議会委員

日常臨床において、埋伏歯にであう頻度は高く、発生頻度に関しては様々な報告があるものの、日本人では3~4%と推測されています。近年、埋伏歯の開窓や牽引を目的に矯正歯科外来へ来院される患者は増加しており、中には隣在歯の歯根吸収が進んでいる症例も多く認められます。それらの症例の中には埋伏歯の発見が遅くなってしまった症例や、経過観察を続けるのか、開窓・牽引を行うべきなのかの判断が難しく、状況を悪化させてしまった症例も多く認められます。

一般的には矯正歯科における埋伏歯の治療は、まずはパノラマレントゲン写真で状況を確認し、埋伏歯の状況によっては、さらにCTなどを使用して3次元的に埋伏歯の状況を詳細に把握した後に治療のタイミング、治療方法の選択などの治療目標を設定し治療を進める場合が多くなっています。今回の講演では、上顎前歯部、上顎犬歯部および上顎小臼歯部における部位別の埋伏歯に対するアプローチについて症例を供覧するとともに、文献的考察も加えて整理したいと思います。さらに、2018年4月より前歯部での3本以上の埋伏歯への開窓・牽引が保険適用となりましたが、矯正歯科治療例は多くはないと思います。今回は当分野における保険適用症例の供覧も合わせて行う予定です。

皆様の明日からの臨床に少しでもお役に立てれば幸いです。